

武家名目抄稿

歳時部二

一

四五六	甲中九册	九架	七函	二五二〇六	和書門類
-----	------	----	----	-------	------

五三函	二架	四五六	册	二五二〇六	和書類
-----	----	-----	---	-------	-----

内閣文庫	
番號	和 25206
册數	457 (251)
函號	153 275



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak



武家名目抄稿第一冊

一歳時部一ノ一目録

門松

若水

屠藪白散度嶂散

函固

圓鏡

船繪



破魔 破魔弓

胡鬼板胡鬼子

羽子板羽子

若菜

七草醬水

五味粥

五節供

海千秋万歳

万歳樂

武家名目抄稿第一冊

廿歳時部上之一

門松

羽尾記云ソノコ口吾妻郡岩櫃城ニ上杉

景勝ヨリ齊藤攝津守ト云者城代ニサシ

ヲキケリ中畧攝津守大手ノ門ニカト松タ

テ歳末ノ祝ノ折カラナレハ云々

嘉良喜隨筆云江戸御城ノカサリ竹ハ竹

ノ葉ヲトリテ用ユコレハ三河ニテ竹タ  
ハ竹ニテ陣中ニテ直ニ被成シ例也

又云小笠原ノ家ノ門松ニハシタニシキ

井ノ心ニ柱ヲニクケハナシヲハスメナ

キハ不吉ノ事故ニケハナシノ心ニコレ

ヲニクコレ故實ナリ

世諺問答云一日あり志ノりある門ノ  
タリタリたし侍るといりある事ニ違

此ノ事松ノ事ハツリありありき

たき事なるへ志ノりあるたり

射屋なる事ありて民戸より侍まるとし

一はア所乃りある事ありたりありて門

にたりしハハの門ありしありそは中

ノ殿ニあるははくは侍るは門なるへ

きふありすそは門のあり松林に侍り

杉をのりてあり侍るは侍るは侍るは侍る

百部水なまはと〜お姫お禮儀〜

若水

江家次第云供立。春水事。舊年封御生氣方  
人家井一用之後廢而不用之。自御厨子所  
付臺盤所女房供之於朝餉。土高坏上置折  
敷押紙。大土器盛。立。春水。居折敷供之陪膳  
居之於高坏上一度御飲畢徹之。

公事根源抄云。若水。とり小事。去年ゆは

紫のふけ井を踏〜若水〜人り海防

此春立日之水。月内裏。奉き仕朝餉。

先できり〜ゆす也。新玉。けあ〜り日。先と

まき。は。若水。〜は〜ゆ

介川大双紙。云。市年。男。子。心。す。の。夏。さ。三。り

い〜も。子。天。之。出。は。を。〜先。後。や。り。し

二。つ。す。り。〜。と。〜。は。さ。守。た。る。魚。〜。見

こつつかむるけく置る人す  
也其後云ありし事とをわく  
より置る也すも亦人し  
侍年男の役也。其後云つり  
かんさやうし多しすも如  
たついの中さゆりつり  
もさゆりつりす<sup>上</sup>物<sup>叔</sup>ありし  
いさきいさき<sup>上</sup>金<sup>叔</sup>ありし

何事もはさし事は少の男の役也

屠蘇白散度嶂散

延喜典藥寮式云十二月晦日卯一刻宮内  
省并寮共候延政門之外闈司奏訖寮官人  
率藥生等昇御藥案相共入置庭中版南共  
以次退出省奏訖更入昇案退却付尚藥但  
屠蘇者官人將藥生同日午時封漬御井令  
主水司守元日寅一刻官人率藥生就井出





七飲めははつ家より病ありつ家より見を此  
にぬきとつ里に病ありとつふりた  
切能侍きは年此何あり見をたつり海  
つ如

年中恒例記云節分之夜白散三箱進上之  
典藥頭仍御會所ノ同朋ニ申次渡之云々  
一八表ノ御酒ニ入一八内儀ノ御酒ニ入  
一八四日ノ御酒ニ入

年中恒例記云正月は白散とつ込系と包  
つ白袋とつ地子乃つとつ子つ以白  
つ由つとつとつとつ

齒固

吾妻鏡脱漏云嘉祿元年正月八日己巳若  
君御齒固賜之後可被遣於何方哉之由内  
内有其沙汰

西宮記云候御内膳供御齒固大根菰串刺

押鮎焼鮎等付進物所進物所例云正月元

日早朝供奉屠蘇御膳事猪穴二盤一焼押

鮎切盛置煮塩鮎一盤同切置但御器者度

於内膳莞盤四口

江家次第云供御内膳自右青瑛門供御齒

固。具盛青莞大根一坏或說三荒串刺二坏坏然而

惣七坏由押鮎一坏切盛煮塩鮎一坏同切

有所見猪穴一坏以難鹿穴一坏以田鳥以上七

坏之内精進物供於第一御臺魚類供於二

御臺或說無鹿

鎌倉年中行事云正月十五日ヨリ内ニ御

齒固ノ御祝アリ平人ノ祝ニ圓鏡之様ニ

ハアラスホソクタカキ御鏡也古衣トテ

長五尺半ニテ七口サ三尺半ナル衣ニコ

ノリヲ付テ縁ヲ取テ四ノスミニ總角ヲ

綿ニテ結テサケタル衣ヲ七口ケテシキ

テ其上ニ御ハカタメヲヲキ申ソレヲ御  
歩敷氏云人有太不可然

年中恒例記云正月御齒固事當月中以吉

日行之仍日不定此次第ノ事先御出座以

前伊勢守ウラ御祝ヲ御座敷ニスヘナラ

へ申ス次ニ御出座アリテ大上臈ハカテ

着也御不参ノ時ハ日野殿御酌ニテ三度

被聞召テ又御退坐也其後中臈ハカテ用之同ム

子ノ参シテ打敷ノ上ニ臺ヲカサネテ下

ニシキタル帛ニテヒキツニミテ御末へ

持テ出ラルニ也如此之後常之三盃参テ

アカリテ御末ニテ伊勢守并諏訪御盃給

之御服拜領之也御酌中臈日取昏ハ有春

朝臣封シテ諏訪取遣之御祝ハ大草調進

之御倉ヨリノ御下行大草ト伊勢守ト向

ノ御手永諏訪也此御祝三ケ日ノ内ニテ

アレハ先諏訪ニ御對面アリテ御祝マ  
ル也

年中定例記云此もかゝるも三月五日

ヨシ松ノヨリヨキ松トシテ若調進由

次一アソハ勢州ヨリ長由服トシ

リ物也

殿中ノ此記云正月五日永日十六由氣國辰刻由服

伊勢傳中能少同府及上野分能

傳之  
勝川親信記云天文八年正月五日甲戌所

ハカカタ辰刻長夜由ウラウキ由強奉行

諏訪信濃守

又云天文十八年正月五日丙子ハカカタ

長夜由由仕由強由強

圓鏡

采女由強云々人由強云々

うきたへりりらる路

河海抄云皇女禎子

三條院女三宮母中宮  
妍子御堂関白女陽明

門院長和三年五月二日于時餅鏡御覽是

其例也

鎌倉年中行事云正月十五日ヨリ内ニ御

齒固ノ御祝アリ平人ノ祝ニ圓鏡之様ニ

ハアラスホリク夕カキ御鏡也

蜻川親俊記云天文七年正月十九日本、三、日午

丹波赤上河守屋將監百之五女也為代

官後之十之河後菱上上取亦方四面也府二

本若云女代有多多也八年十二月廿五日

戊子戌河料河後遂上之十一年正月十一

日壬辰河後河後三十之府也河後通運

大上取親俊也一岩法師五前侍之十二

日亥己河後河後河後河後河後河後

蜻川家記云永祿五年正月十日相理河内



何云のく入のつは水あふく板の如  
不是くく儼く福山繪等極く多れとの所  
使立市二條より此角と梅山名人より不  
足此所あとりきりし分分此所相阿む  
りし所所なれく調し事ものし  
新原隠等と禁意此室船と後小松院此夏  
こ所流シテ畫セ玉つ模ノ一字別宸鑑  
リト云ナキイトノ黄金ノ釜ノ煤ヲアツ

トテ板ヲスルト云リ

破魔 破魔弓

武雜記云正月始く八眼を射小弓より射  
予志ゆりり八人眼危くく後一人射る  
とをなほし極く多射也又とと板と  
て五能多しりくを射是はく我は  
いしゆ也

伊勢貞文等記云天和國ニテ正月小弓の





櫻陰腐談云客問曰正月破魔子何義也答

曰推破魔旬之謂也

胡鬼板胡鬼子

羽子板羽子

後崇光院御記云永享六年正月五日朝薄

雪降柳室町殿鶉一極十給之每佳例云云

令祝着宮御方一キウキウ球杖三枝一玉色々且色々

板繪等風流二繪等風流の子五被進言語道

断殊勝驚目了御自愛無極

年中恒例詔云正月一日ほッギバッ臺

スハル也光雲寺進上之日失念也

又云二月一日所ニ井ニ所ニ知レ知レ以

下所進上之

又云十二月廿九日一所知レ知レ十二編

八閏月左之年チリ取一ツハウキノ五二

所大上多ト棟梁欽ニ同也人ナカ



ゆふさき此ことてつき侍るる

季瓊日録云寛正五年正月廿一日被覽猿

樂而賜羽子板羽子扇子尤為寵光也

忠富王記云文龜三年正月七日御コキ板

コキノ子長橋文くあらや小館由

被仰出

言継卿記云天文、年正月七日戊子息

女唱食ニ羽子遣之

多聞院日記云天正四年十二月十六日ハ

二板所ある所かりき下代一斗六升

ニテ買之

永禄年中節用集云胡鬼板胡鬼子小鬼正

### 若菜

枕草紙云七日のかかあき人の六日小文

くさけきとわらあすらふるもあ

ぬきと子ともものとしてきるもあ何と

あまのこころいふとつんとやうなうしつなす  
りてゐるといふかきうんあまをいみくあま  
とあんなふとふとあまあまはあんなか  
りりきぬいふあまあまあまあま又  
おろけをうまの生たういふとあまあま  
は

あまのこころいふとつんとやうなうしつなす  
りてゐるといふかきうんあまをいみくあま  
とあんなふとふとあまあまはあんなか  
りりきぬいふあまあまあまあま又  
おろけをうまの生たういふとあまあま  
は

まほしきと聞つたうしつとあまあま  
公事根原抄云若菜内藏寮并に内膳司よ  
り正月三日のあまをいみくあまあま  
よまあまのあまあまあまあまあま  
あまあまあまあまあまあまあまあま  
四年二月十九日女陣安子に朝臣若菜と  
奉る由若菜玉に話るあまあまあまあま  
二種供してあまあまあまあまあまあま  
あまあまあまあまあまあまあまあま



季瓊日録云文正元年正月六日郡家村若菜七籠献之盖曰例也抑故事有御覽而尚祝義可書進之由被仰出也須智村芥菜二籠献之盖曰例也

卷川親元記云文明十五年正月六日庚子下津屋三郎左衛門尉親信方ヨリ若菜五十把大根五十把山芋五十本牛房十把芥二籠遺之嘉例也

卷川親俊記云天文十年正月五日庚辰桐野河内万石奉費以供若菜。卷上。多同院日誌云元德三年閏正月七日若菜。祝儀抄法之

下卷川家記云永祿五年正月五日。如佳例万石万石神供若菜。到建長後、百石三斗也。百石同一荷

七草ノ醬水

公事根原抄云正月七日ニ七種の菜羹を  
食すれは吾人百病を又形象とのえく  
術<sup>元々</sup>の傳らとらんくく

又云七種の粥と白穀大を少をあはし  
りかきさくけやとなると九条が承和の  
此記よりんくく

堪囊抄云正月七日ノ七菜。パ。ア。ツ。ロ。ハ。ト  
云ハ七種ハ何ニツ七種ト云ハ異説アル

也。不一准或哥ニハ  
セリナツナ五行タヒラカ仏ノ啗アシ  
ナニニナシ是ヤ七種

芥五行ナツナハユヘラ仏ノ啗スニナ  
ニニナシ是ヤ七種又或日記ニハ薺蓼蓼  
五行スニシロ佛ノ座田ヒロユ是等也ト  
云々但正月七日七草ヲ献スト云変更ニ  
ナシ





御五味粥參也

五節供

式目新編追加云五節供事右元課百姓事  
可令停止之矣右可停止之由先下知已畢  
而今地頭面々所申聊非無理歟三月五月  
七月九月分者一向不可為地頭口入至  
于歲末節料者地頭可分取也

新式目云新制修正應三五節供事右元

課百姓可令停止之矣

千秋万歲

万歲樂

長秋記云天永四年正月十六日鷹飼下毛

野公久空年入中門人々稱似千秋万歲之

由云々

源平盛衰記云

質盛被討矣

柳實盛石打征矢

ヲ負錦ノ鎧直垂ヲ着ル事ハ今度北国へ

下ケル時内大臣ニ申ケルハ略中故郷へハ  
錦ノ袴ヲ着テ飯ノト云事ニ侍レハ今度  
生国ノ下向ニ錦ノ直垂ニ石方ノ征夫御  
免ヲ蒙リ候ハン且ハ最後ノ御恩也ト所  
望申ケレハ初ハ免シ給ハサリケルカ既  
ニ去立所ニ賞盛思切タル顔氣色且ハ哀  
ニ思且ハ軍ヲ勸ム為ニ内大臣ノ我料ト  
テ秘藏セラレタリケルヲ取出シテ下シ

給へリ賞盛畏テ賜テ千秋万歳ノ心々ノ  
リ着タリケル

東山往來云一日法事之刻貴房召堂預之  
法師取一枝之花向佛被表日爰家中小男  
致傍難曰講師御房無持香爐而捧花枝頗  
似元正千秋万歳之法師云々  
花園院御記云文保三年正月一日千秋万  
歳法師等参入乱舞了退出

花鳥録情云男踏歌ハ夜上地下の四位  
下の輩志うるへき形：どそちりてせい  
はらさういおひう形う。ああり是を  
昔正月十四日。之京中の極正月の集  
くあな。あな。いへあうううい舞し  
ありあおあきう末代く多秋万歳と  
うひく逸興とのりあすあやあ。是當の  
路尾多り

卧雲日伴録云文安四年正月二日一種乞  
食葷歳首到人家歌祝言世号之千秋万歳  
前后相逐来各與百錢

年中恒例記云正月七日午秋菊系糸於松  
蔭。舞之。以。冬。刀。被。中。之。同。朋。為。之。以。供  
衆少。何。

文禄清談云去ル天正ノ末石村探校ト云  
音目了リ此者有律ヲ多裡ニ握リ諸局ヲ

誦ンシ覺悟メ世ニ鳴ルト云是故ニ公門  
武家物ノ不便セサセ玉ヲ増シテ工商  
祐ノ者彼レヲ貴ンテ市ヲナス同十八年  
正月礼賀ノ為ニ先堂上ヘ赴ケルニ此旨  
者ノ手ヲ引リ者頃田舎ヨリ罷上リテ諸  
事無下ナリトテ物無ニ再往念ヲ遣ニ召  
仕ケリ今日手ヲ引カスルニ教ヘテ云ク  
禁闕堂上ノ御門へ入テ若長袖ノ御人躰

ナテハ我ニ申ヘシ跪キ礼ヲナスヘシト  
庭訓ヲ含メテ正親町ノ西面ノ御門ヨリ  
入ル時彼座頭云テ云此所ヨリ内方様ハ  
皆雲上ノ御貴人也アヤシキ人相ノ御方  
トミルナラハ我ニ告ヘシ貴人堂上ノ御  
方ハ平人ト衣服モカハリテ長袖也但長  
袖ト云ニ子細アリ必ス御首ニ物ヲ戴カ  
セ玉ヲ是ヲ則御公家ト云々トヘ長袖ナ

リトモワフリニ物ノナキハ凡人也ヨク  
ヨク見分テ我ニ知スヘシトクリ返シク  
リ返シ申ケル扱御門ヲ入トヒトシク彼  
手引告テ云御申ノ御方様是御通り辰ト  
サニヤキケレハ座頭膝行領首シテ白砂  
ニ手ヲ突シカニニノ檢校ニテ御座辰ト  
一礼ヲ申ケレト何ノ御答モナシ又使ヲ  
給リテ御返シト云丁モナカリケリ扱如

此シテ下馬スル丁一町ノ間ニ十ヶ所ハ  
カリモ跪キケレハ終日ノ礼ニハ百四五  
十所モツクバハセケル間身モヒハ氷衣  
毛沙泥ニナリケルトナシカヤウニ夥シ  
ク下馬スト云へ此一度モ御詞ニ預ル丁  
ナシ坐頭モ草卧レテモハマイワシカ手  
引ト共ニ帰リテケリ扱宿ニテ休息メ彼  
手引ニ云ヒケルハ毎年ノ御礼ニハ上方

様ヨリ御詞ヲ下サルニ又サホト下馬モ  
セス唯御屋形江参ル許也扱々今日ノ下  
馬ノ事不思議也若汝人違シテ我ニ告又  
ルカ又御公家ナラハ定メテ同御方ニ幾  
度モ礼ヲ致サセケルカ不審也最前ヨリ  
能ハ示教ヘケルニト云ヘハ彼手引カ云  
先刻ヨリ御教ノ御方ナラテハ御告不申  
ト云猶不審ニ覺ヘテ首ニハ物アリヤト

左様ニ云サテハ弥々不審也長  
袖ヲ召タルニヤト問ニイカニモ長袖ノ  
大紋ノ帷子ヲ召シ手ニ鼓ヲ持セ玉ニ御  
供ノ人多クハ袋ヲ持セ給ト云彼座頭仰  
天シテ扱ハ子細ナキ万歳樂ナリ口情惜キ  
ト也ト云テ其手引ヲ暫追籠メケルトナ  
ン此事彼坐頭カ門第密ニ人ニカタリテ  
侍ト也

藤葉榮衰記云 民部大輔濱尾城退出條 正月十一日ノ

朝民部大輔殿御對面ナリケレハ御出仕

ノ妝ヲ刷ヒ登城ニ給ケレハ屋形モ御装

束ヲ被召御廣間へ御出在テ同坐ニ席ヲ

薦ノ給フ先ツ年頭ノ万歳ヲ祝シ畢テ御

盃ノ上ニ御中直リノ驗ニ御装束ヲ御脱

キ互ニ御取替着シ給フ

武家名目抄稿第一冊

明治十六年一月 日稿校正 小野由久

同年同月七日 再校筆書 青山景通

同月九日 日稿逐一校了



明治十七年四月六日 校 青島英保 為

泰西曆一千九百零六年六月廿九日 青島電報局

青島電報局 泰西曆一千九百零六年六月廿九日

青島電報局 泰西曆一千九百零六年六月廿九日

青島電報局 泰西曆一千九百零六年六月廿九日

青島電報局 泰西曆一千九百零六年六月廿九日

青島電報局 泰西曆一千九百零六年六月廿九日

青島電報局 泰西曆一千九百零六年六月廿九日

武家石日校初等一冊





